こども家庭科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）
分担研究報告書

F-SOAIP 記録による保育者の意識変容

研究代表者　上田敏丈　名古屋市立大学　大学院人間文化研究科　教授
分担研究者　小嶋章吾　国際医療福祉大学　医療福祉学部　教授
分担研究者　嶌末憲子　埼玉県立大学　保健医療福祉学部　准教授
研究協力者　中村聖子　大倉山元気の泉保育園　園長

研究要旨

本研究では、項目形式の記録法の一つである F-SOAIP を、保育所における保育記録へ援用したことによる、保育者の意識の変容を明らかにする。約 1 年間、F-SOAIP を用いて保育記録を書いてきた保育者 12 名にインタビューを行い、インタビュー・データをうえの式質的分析法を用いて分析した。その結果、①保育者個人の記録の連続性「流れ」への意識の変容、②保育者間の記録の連続性「つながり」への意識の変容、③大切なことの実感と再認識によるダブルループ学習への変容、という保育者の意識の変容が見出された。

F-SOAIP を使って記録を継続する中で、保育者は保育記録を書く際に、F-SOAIP の項目を用いて自分なりの「流れ」を意識するようになっていた。例えば S（子どものことば）→F（活動のテーマ・ねらい）→I（支援・対応）→O（子どもの姿）→A（気づき・考え）→P（計画）といった「流れ」を意識することにより、保育者個人レベルでの循環的な保育の過程を負担なく実行できるようになっていた。また、複数の保育者が保育記録を共有する際に、F-SOAIP の項目を用いて、保育の連続性を途切れさせないようにすることを「つながり」として意識するようになっていた。そのことが、保育者の思いや保育の意図をつないでいくためには記録を共有することだけでなく、保育者同士の対話が必要であるという再認識を導いていた。さらに、記録を書いたり読んだりする際に、個々の項目の内容に着目するようになっていたことが明らかになった。

A.研究目的

保育の質向上のための、保育記録の活用の重要性が論じられる一方で、多くの保育者は保育記録に負担感や悩みを抱えている。例えば、中川ら(2021)の就学全施設における保育記録の役割やあり方を検討する調査では、10 名の保育者全員が保育記録に苦手感、義務感、多忙さなどの負担感を抱いており、これらを解決するには保育記録に対する義務感の解消と保育記録を書く目的の明確化が重要であると考察されている。また、吉村(2012)は、保育者が「書く」ことに困難

を感じるのは、保育者の実践が「感覚的身体性」によって成り立っているからであり、「抽象度の高いことばはその表現として違和感がある」からだと述べている。

近年、保育現場にはマップ型記録、ウェブ型記録, エピソード記録, ドキュメンテーション、ラーニングストーリーなどの多様な保育記録の手法が紹介されており、河邉(2019：145)は「それぞれのメリット・デメリットがあり、保育者はこれらを把握して戦略的に使いこなす意識をもたなければならない」と述べている。大豆生田(2021：8)は、「複雑で、あいまいで、不確実な特性」である保育という行為を「意識的に言語化あるいは可視化しようとする」保育の記録において、「記述方法はどの方法が絶対的ということではなく、探究的であることが大切」であるという。

さらに嶌末・小嶋（2020）によれば、保育記録も含まれる対人支援専門職の記録は、叙述形式の記録法によるものが多く、記録者が自由に書けるメリットがある一方で、長文になりやすく、接続詞や伝聞調の多様による読みにくさ、情報不足の見落としやすさなどのデメリットがあり、記録者の文章力に左右されるという問題があるという。一方、項目形式の記録法はこれらの問題が解消されやすいとも述べている。

先述した国内外の多様な記録法はそれぞれに優れた点があるが、共通して叙述形式による記録であり、前述のデメリットは潜在している可能性がある。項目形式の記録法の保育分野での取り組み事例は多くはないが、項目形式の記録法の保育記録への援用に関する先行研究として、河邉(2019, 2021)は看護領域で活用されている「SOAP法」の保育記録への援用を紹介している。SOAP は子ども理解の視点であり、保育者が「理解から援助へ」と保育を構想していくための思考過程のモデルであるとし、「SOAP 法」の援用は思考過程の意識化、可視化を促すのではないかと述べている。

以上のことから、本研究では、保育記録への F-SOAIP 援用の継続による、保育記録や保育実践についての保育者の意識の変容を明らかにする。

B.研究方法

研究協力園は、A 市の私立認可保育所 B 園である。研究対象は B 園の保育者 12 名である。B 園では、2021 年 1 月から保育記録に F-SOAIP を導入している。

B 園への研究協力依頼は、HIS（歴史的構造化ご招待）を理論的根拠としている。

B 園の保育者 12 名に対し、2021 年 12 月～2022 年 1 月に、1 回 2～3 名、20～30 分の対面のグループインタビューを 5 回に分けて行い、レコーダーで録音した。5 回分の合計時間は 125 分であった。保育者には、1 年間、F-SOAIP の 6 項目を使って週日案・日誌、月案を書いてみて、保育実践や自分自身の考えに変化があったかという視点で、自由に話してもらった。

インタビュー・データは、うえの式質的分析法(上野 2018)を用いて分析した。まず、音声データをノンストップで再生しながら、研究目的を明らかにするために必要だと思われるコンテンツをユニット化（単位化）した情報ユニットを生産し、一つずつカードに記載した。次に、それぞれのカードを「似ているならまとめる」「違うなら分ける」という作業を繰り返して、グルーピングを行

った。そして、グループを構成しているカードの共通点を言語化し、「表札」として付してメタ情報を作成するカテゴリー化を行った。さらに、メタ情報同士でマッピングを行い、「因果関係」「対立関係」「相関関係」のいずれかの論理関係を表す矢印でつないでチャート化し、チャート図を作成した。最後に、チャート図をもとに、メタ情報を必ず1回以上使い、必要に応じてインタビューで得られた保育者の語りも引用しながら、ストーリーテリングを作成した。分析結果を図1に示す。

倫理的配慮として、研究を開始するにあたっては、園長及び保育者 12 名に、研究目的と研究内容を口頭と書面で説明し、個人が特定されないこと、拒否できること、その場合でも個人に不利益がないことを伝えた上で、書面で同意を得た。

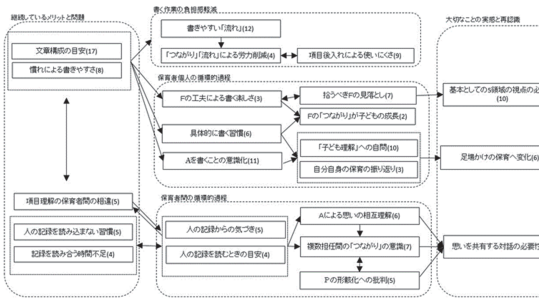

図1　意識変容のチャート図

C.研究結果

分析の結果、情報ユニット 167 個、メタ情報 23 個が生成された。

1）書く作業の負担感軽減

F-SOAIP が文章構成の目安となり、頭の中で項目ごとに文章を考えているため、考えがまとまりやすい、書きやすいと感じることは、導入2 週間時点から1 年後も継続していた。また、やりながら少しずつできるようになって、徐々に慣れによる書きやすさも感じられるようになっていた。そして、保育者それぞれに F-SOAIP の項目を使った自分なりの書きやすい「流れ」ができていた。それが、反省の P を、子どもの姿、ねらいにアレンジして使えるといった、項目の「つながり」「流れ」による労力削減を可能にしていた。一方で、文章を書いてから、後から項目を追記している保育者は、項目を考える手間があったり、どの項目に当てはまるのか悩んだりしていて、項目後入れによる使いにくさが明らかになっていた。

2）保育者個人の循環的過程

F-SOAIP を使って書く中で、F がうまく立てられればその後を書くのも楽しい、楽しく書けるのがいちばんいいと、F の工夫による書く楽しさに気づいたり、O が多く A がすくないことが自分の改善点として A を書くことの意識化を多くの保育者が経験したりして、記録を具体的に書く習慣がついてきた。特に、週や月の反省について、感想みたいな記録を書いていたが、子どもの姿を入れながら書くようになったり、なぜそういうことをしたかを具体的に書くようになったりしていた。そして、自分の思ったことも含めて子どもを理解している、A なか O なのかという「子ども理解」への自問が生まれたり、記録を書きながらなぜそうしたのか、どう思ったから次につなげたいのかという自分自身の保育の振り返りを促したりしていた。これらの変化によって、保育実践自体について、つぎはどのくらい段階をあげたらいいのかがわかりやすく、子

どもの発達を理解したものに変わってきたなど、足場かけの保育へ変化したと感じていた。同時に、F に着目することによって、F の「つながり」が子どもの成長であると発見したり、一方で、人によって問題をポイントとして捉えていないなど拾うべきF の見落としもあると感じられることもあった。そのため、保育者に共通の基本としての 5 領域の視点の必要性も再確認していた。

3）保育者間の循環的過程

F-SOAIP による書きやすさの一方で、自分が思う F、S、O、A、I、P と人が思うものが違うといった項目理解の保育者間の相違は継続していたが、同時に、この人はこれが A なんだ、これが I なんだと考えが広がるなど、人の記録からの気づきがあると感じていた。また、項目があることでだれが読んでも、こういうことだからそうしたんだなとわかりやすいと人の記録を読むときの目安として有用であるとも感じられていた。

人の記録を読み込まない習慣や記録を読み合う時間不足も継続していたが、みんなの記録を読めたり、他のクラスの記録を読めたりしたら、おもしろいなと参考になるのではという思いも発生しており、F-SOAIP は時間がないときに、どれを大切にしているか拾いやすいと、人の記録を読むときの目安として活用もされていた。

そして、こういうことを思って、こういう対応をした、何を考えて何につなげたいのか、何につなげたくて今こういうことをしているのかがわかるという、保育者間の A による思いの相互理解ができるようになっていた。それが、複数の保育者が担任をしている場合に、前の週や月の人が、こういう考えでこういうことをしたから、その続きでこうやっていこうと考えるといった、複数担任間の「つながり」の意識へと広がっていた。一方で、P は実行しないと次の反省につながらないと P の形骸化への批判も出てきた。その中には、自分が立てた P が自分の行動としてはつながっているが、次の人の記録としては残せていないといった状況も含まれていた。そのため、何をするかは話しているが、本当に何を思って保育にあたっているかは話したことがないと気づき、自分の思いをバトンしていくために、もっと密に話していかないといけないと思いを共有する対話の必要性を実感し、再認識していた。

D.考察

保育者の意識の変容

B 園における保育記録への F-SOAIP 援用は、F-SOAIP の 6 項目が文章構成の目安となり、保育者の記録の書きやすさに貢献していた。さらに、保育者の保育実践や保育記録への意識の変容を促し、それが個人および保育者間での循環的な保育の過程の形成に貢献していることがわかった。以下、3 点である。

①記録の「流れ」による保育者内の意識変容が明らかにされた。

②記録の「つながり」による保育者の意識変容が明らかにされた。

③実感と再認識によるダブルループ学修への変容がおこなわれたこと。

E.今後の課題

今後は、保育記録への F-SOAIP の援用の

中で保育者が抱いた違和感を丁寧に解消し、保育領域特化した F-SOAIP の援用法を確立していく必要がある。例えば、同じ事象を保育者によって違った項目として記載していることがある点については、事例の収集による保育の文脈における項目の使い方の傾向の検討などが必要である。